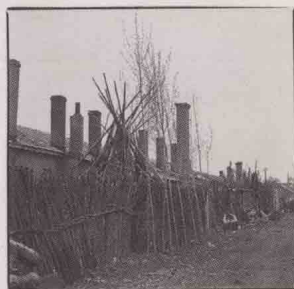


LE SORGHO ROUGE
Ya Ding

ヤー・ディン

佐宗鈴夫・訳

赤い コリアン



LE SORGHO ROUGE
Ya Ding

ヤー・ディン

佐宗鈴夫・訳

赤い コリーヤン



LE SORGHU ROUGE

by Ya Ding

© 1987 by Editions Stock

This book is published in Japan
by arrangement with Les Editions
Stock, Paris, through le Bureau
des Copyrights Français, Tokyo.

赤いコーリヤン

一九九〇年三月二五日 第一刷発行

著者 ヤー・ディン

訳者 佐宗鈴夫

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一五〇 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇一六二〇〇

販売部 (〇三) 二三〇一六三九三
製作課 (〇三) 二三〇一六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

©1990 Shueisha

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

赤いコーリヤン

写 装
真 丁
江 木
成 村
常 裕
夫 治

目次

第一部

7

第二部

199

解説

佐宗鈴夫

361

父に

そして、親友の

ジョエル・ヌーダン

クリスチャン・ティモーニエに捧ぐ

第一部

ばくたちはいったいどこへ行くんだろう、ほんとうにどこへ行くんだろうか？

リアンは後ろを振りかえった。黄色い土ぼこりをふせぐため、手で口を押えている。息がつまりそうだった。車輪とロバの歩みが土ぼこりを立て、それがヴェールのように降ってきて、彼らをつつみこむ。かたわらで、妹がぐずっていた。

あたりの様子が変わっていた。もうもうたる紅土の土ぼこりごしに見る影、陽の光。痩せこけた毛のないロバは夜からずっと荷車を引きつづけ、荷車は軋む音を立てていた。そのギイギイいう音が夜からずっと道を進みつづけ、リアンの頭に轍をきざみこんでいく。彼は数をかぞえた。五歩、二度の揺れ、五歩、二度の揺れ、五歩……でこぼこ道、軋む音、耐えがたいその数。ばくたちはいったいどこへ行くんだろう？ 舞いあがる土ぼこりのなか、荷車を引いている年老いたロバは行く先を知っているんだろうか？ 長征にくわり、毛主席と行をとにした、父の街の友人で党の指導幹部、老カオと同じように、ロバもまた耳に白い毛がいつぱい生えていたから、まちがいなくリアンよりはずっと年老いていた。けれども、ロバは行く先を聞くことができない。でも、リアンの場合は、聞いて悪

いことはなにもなかった。聞く権利があった。彼は九歳の子どもにすぎないけれど、いっしょに連れてこられたのは、彼がいなくてはならないからだ。「みんなそろってるか？」と、父は言ったのだ。リアンがそこにいなければ、妹ひとりだけで家族は成りたないだろう。リアンはまだ九歳半にすぎなかった。物事を決めるのは彼ではない。彼はただ従うだけだ。家族の一員ではあっても、品物のようなもの、荷車のうしろに父が積みこんだ赤い木製のトランクのようなものだった。つまり、両親が決定をくだせば、子どもたちは従うしかなかった。

あたりの様子が変わっていた……影、陽の光。

昨日は、街にいたのだった。今日は、ちがう土地にきている。だけど、いったいどこだろう？　こんなことがあるだろうか？　なにも知らないなんてことがあるだろうか？　食卓が汚れていたり、時計のねじを巻いたりするとき、父はあれこれ言うひとだったから、ひとことぐらいなにか説明があつてもいいはずだった。この間のことだけれど、夕食のあとで、彼は父に肩をつかまれた。「今晚、映画に行くぞ」こういう言葉はすらすらと口をついて出る。父は小楊枝を使いながら言ったのだ。リアンにとつて、その言葉がどんなにうれしかったことか。無造作な口調であっても、とにかく確かにそう言ってくれたのだ。その夜は、これから観る映画のことを想像して、彼の足どりは元気いっぱいだった。声は出さなかったが、まるで決めるのが自分であるかのように、リアンはこう言っていた。うん、行こう。あいにくいつもそうだとはい限らない。その逆だった。大人たちはなにも言わずに、自分の行きたい場所へ子どもを連れていく。今日のように、安心も、喜びも、想像する楽しみもあたえて

くれず、あたえられるのは、悲しみと退屈と不安と、それに、とどのつまりは疲労と倦怠だった。
ぼくたちはいつたいどこへ行くんだろう？

五歩、二度の揺れ……道と荷車の揺れ、紅土と小石が肋骨にひびき、腰が痛くなりそうなときに、
どう質問したらいいんだろう、どう切りだしたらいいんだろう？ 口を開けば、土ぼこりが入ってくる。土ぼこりとこの頭上のいまましい太陽。太陽はきらめく無数の針だった。彼はしかたなく目を
つぶっていた。

それに、セミの鳴き声。おびただしい数だ。リアンたちがやってきたことに激昂して、セミが閤とまの
声をあげているのではないだろうか？ ひよっとすると、リアンたちやロバや荷車に襲いかかってくる
つもりなのか？ 陽射しはまぶしかったが、薄目を開けた。どこにいるのか探そうとしたが、セミ
は一匹も見つからなかった。

いや、なにもかもうんざりだった。と言うより、面倒臭かった。なにもしていないでいるほうがよかつ
た。心配したって、なんになるだろう？ 荷車が止まるまで、ただ眠っていればいいのだ。止まれば、
なにもかもわかる。リアンは眠ろうとした。

「お母ちゃん、水が飲みたい！」幼いリンが揺れながら、大きな声を出した。母が頭にかぶせてくれ
た日除けの白いスカーフを両手で引っ張りとうとうとしている。

母のワンが汚れた水差しを差し出した。リンはしっかりとつかみ、陶製の注ぎ口に唇をつけて食むさばるよ
うに飲んだ。砂利の下から湧き出す泉のような音がした。

父は身じろぎもしないで、背筋をしゃんと伸ばし、荷車の揺れにも平然としている。なにも見えないようだった。左手で手綱を握り、右手には柳の枝を持っている。その枝で、父は放心したように毛のないロバの尻を叩いていた。荷車に揺られ、首をまっすぐ立てて、一点を見つめながら、遠く、その道の果てに、父はいつたいなにを眺めていたのだろうか？

妹が飲んでゐるのを見ると、リアンもはげしい喉の渴きを覚えた。「ぼくだって、ぼくだって飲みたいよ」と、母に言うことはできただろう。けれども、黙っていた。母にこう言われたくなかった。

「リンが飲んでからね」あるいは、もっとひどく「もちろん、リンの飲む分しかないのよ……」これ以上気づまりな場面があるだろうか？ 妹が生まれてからずっとこんなふうなのだ。彼がなにか欲しいと、妹がかならず欲しがり、とられてしまう。彼の欲しいものは妹も欲しがるので、欲しいと言えなかった。

「お兄ちゃん、喉が渴いていないの？」そう言いながら、彼女はふたたび水差しに口をつけた。が、もう飲んではいない。ごくごく飲みこむ苛立たしい音がしなかった。口の端からヒューツと音をさせながら、水差しをおもちゃにしていた。

「リアン、眠ってるの？」と、母が聞いた。

リアンは返事をしない。意地悪い喜びを感じていた。様子を窺いながら眠ったふりをしている。ほんとうに、そうしていると、楽だった。相手に気づかれることなく、その行動を観察し、判断できるのだ。眠っていれば、相手はこっちのことなど考えない。と言うより、こっちの頭のなかにあるもの

など気にしない。いないのと同じだった。

「眠ってるの、リアン？」と、母が聞いた。

「眠ってるんなら、眠らせておくがいいさ」父のリーはそう言って、ロバの尻にさらに容赦なく鞭をくれた。

ロバが反抗して、後足で蹴った。荷車がはげしく揺れ、道からはずれて、脇の畑に突っこみ、トウモロコシの穂を押しつぶした。みんなが叫び声をあげ、文句を言ったが、リアンだけは依怙地に眠ったふりをしていた。

リーがぴよんと地面に飛びおりた。その間拔けなロバを道にもどそうとして、力いっぱい引っぱった。けれども、ロバはそっぽを向いている。畑から出そうとしている父の手より毛のないロバの首のほうが力は強かった。父も負けてはいない。身体ごと押していた。双方の力は拮抗している。どちらもびくともしない。リアンは薄目を開けていた。思わず微笑がこぼれる。ジュート（麻）の袋を枕に荷車の上で寝たまま、彼はロバと父の闘いを眺めていた。父にかなうものなどないはずだった。でも、ロバが党の責任者に勝ったとしたら？ リアン、そんなことを考えるなんて恥だ！ 彼は身ぶるいし、頭を振って、その考えを追いはらった。土ぼこりが荷車の周囲で舞いあがり、汗で光っている身体にふりかかった。太陽が争っている両者を嘲笑していた。陽の光がどっと起こる笑い声のようだった。

荷車が前に傾いた。リーの負けだった。力つきて、彼はロバを勝手にさせておいた。すると、ロバもおとなしくなまって、止まった。

「どうしたらいいか……」とつぶやいて、リーは汗とほこりがいっしょになった顔の泥を爪でかいた。「水が欲しいのかもしれない！」と、リンが大きな声で言った。そして、古びた水差しをロバのほうに差し出した。

「きつと疲れてるのよ」ワンが水差しをリンのほうへ押しもどしながら言った。「今朝から何里ぐらい進んだかしら？」

「十里ってとこだな！」父ははっきり言った。

「まだまだなの？」

「おおよそ半分だ」

ばかばかしい気持ちになった。いつまでも眠ったふりをしていゝるわけにはいかない。目を開けて、話をし、自分の意見を言つて、父といっしょにこのいまましいロバ、このロバの奴を畑の外に出して、歩こうとしないのを歩くようにしなければならなかった。荷車がはげしく揺れたために、足が痛かった。大きな木のトランクがぶつかってきたのだ。ロバの奴め！ 蹴とばしてやりたかった。

起きなければならなかった。大きな声を出して、両腕を伸ばそうか、「お母ちゃん」と呼ぼうか、それとも、黙つて起きあがろうか？ 狸寝入りと気づかれないようにするには、どうすればいいのか？ 眠ったふりなどすべきではなかったのだ。

ロバは落着き、口籠くちかごごしにトウモロコシの穂を食べようとしていた。ワンが荷車からおりて、リンを抱いた。

「氣まぐれな奴だ」と、リーが言った。

「街を離れるのをいやがってるのよ」

「でも、わたしは田舎がいい」と、リンが言う。

リーはロバの口籠をとって、押しつぶされたトウモロコシの穂をあたえた。

「木がなくて残念ね。ひと休みできたのに」ワンがため息まじりに言った。

「おーい！ トウモロコシ畑にロバを入れちゃ駄目じゃないか！」その声に、みんなびくつとした。トウモロコシを積んだ手押し車を押しながら、農夫が背後からやってくる。

「いや、困ってるんだ。どうしようもないロバで、言うことを聞かないんだよ」リーは言い訳した。

農夫は歩みを遅くし、いぶかしげな目つきでこつちをじろじろ眺めた。そして、結局は足を止めた。「わかってないな、ロバはいつだって人間にさからうんだ。畑から出したけりや、なかに追いたてのさ。そうすると、ロバは反対の方向へ行く。さもなけりや、畑のなかに入っていつちまうよ」

農夫は手押し車を置いて、ロバのほうへやってきた。地味なぼろぼろの服、日焼けした顔、眉の下のくぼんだ目。年齢は見当がつかない。農夫はロバの首をつかんで、畑のほうへ押しやった。ロバはあくまで言うことを聞こうとしなかった。押すと、さからって、人のいるほうに寄ってきた。そうやって、農夫は三、四度肩で押して、ロバを首尾よく畑から出した。

「うまく行ったわ、おじさん！」と、ワンが言った。

「ほんとにありがとう、おじさん」と、リンも言った。

「なんというお利口さんだ、この子は！」農夫はうまく行つたので満足げに微笑した。そして、聞いた。「どこへ行くんだね？」

「シン・チョウアンだ」と、リーが答えた。

「わしはその者だよ……」男は目をしばたいた。「省長のリーかね？」

「そうだが、なぜ知ってるんだい？」リーが驚いて言った。

「いやいや！ わしはなんにも知りませんよ、わしは」農夫はきゆうに口調をあらためて、そうつぶやき、心配そうな様子で手押し車のところにもどった。

「まだ遠いんですか、おじさん？」と、ワンが聞いた。

「あと二十里ほどですよ」農夫はそう言つて立ち去った。

「おかしな人だ……」リーは農夫が遠ざかっていくのを見やりながらつぶやいた。一家はまた進みはじめた。

正面の地平線上にある太陽がじつとしたまま、白熱した経帷子^{きようかたびら}、白っぽい炎でこの彩りのない大地をつつみこんでいた。炎だろうか、それとも風だろうか？ まわりで、土ぼこりが渦をまいて舞いあがった。この単調さのなか、聞こえるのはロバの蹄^{ひづめ}の音だけだった。池も、小川もなく、あるのは乾ききった土ばかりで、それがかさかさ音を立てて、ひび割れていた。リアンが夢のなかで見たような畑などなかった！ 彼らが入りこんでいく田舎は瘦せた畑が一面に広がり、トウモロコシもコーリヤンも生育が悪く、葉がちぢんで反りかえっていた。その葉っぱと同じように、リアンは目をつぶり、